

# 新会長挨拶と新役員紹介

片桐 一

旭川医科大学, 病理学第2

今度、日本組織適合性学会の会長を仰せつかり、大変光栄に思います。学会が発足して5年目と若い学会ですが、研究会時代から考えると成熟期を迎えている学会と思います。移植を成功させるために外科領域の強い要望に支えられて発達した HLA 研究は、今や移植医学のみならず、生物学、免疫学、遺伝学等に重要な意味を有することが次から次に明らかにされてきております。現在、HLA 抗原の働きが分子レベルで解析され、そして遺伝的多型は DNA レベルで決められるという、研究の流れは頂点にあると思われまふ。移植医学への貢献としては、多型性決定の簡便な方法の開発とその高い清度での維持、そして移植免疫の詳細な解析をすすめる必要があります。そしてこれまでに明らかにされてきた疾患と HLA との相関を分子レベルで解析すること、免疫応答の HLA 分子による制御の解析、MHC 領域全遺伝子の構造と機能の解析等が現在取り組まね

ばならない研究と思っております。これらを考察しながら、時代が要請する研究を先取りし、動物の MHC 研究も加えた新しい方向性を模索したいと思っています。

学会員の皆様は、独創性を有する研究に挑戦し、そして各々が助け合いながら、協力体制のしっかりした学会へ発展させたいものです。会員の一層の健闘をお祈り申し上げます。

新役員：会長 片桐 一

理事 赤座達也 (会計), 猪子英俊 (編集), 木村彰方 (会則/庶務), 笹月健彦 (渉外), 十字猛夫 (事務局長), 徳永勝士 (選挙), 内藤説也 (教育), 前田平生 (標準化)

監事 柏木 登, 吉田孝人

# 年 輪／会長の任期を終えて

吉田 孝人

浜松医科大学名誉教授／昭和大医学部，細菌学

我々の学会も第5回目の総会を経て3代目の会長片桐一教授の時代に入った。20年間の研究会の歳月を入れると4半世紀が過ぎ、MHCは新しい時代の到来と共に生物学的意義とその重要性／生命とのつながりをますます感ずる昨今である。

——会長は任期を2年で交替，会の活性化を——

2年前のこと会則によって理事が選ばれ，新しい理事会メンバーによって会長が無記名投票で選ばれた。1994年7月浜松での第3回総会の時であり，私は相沢幹初代会長の後を引き受けることになった。この理事会で会長は1期2年として，会長の特徴を出してもらおうのがよいだろうという意見が出た。会則には再選はさまたげないとあるが，申しおくり事項にして会の活性化を計かろうではないか等々という意見が出されて全員で一致をみた。

——会誌の発刊とニュースレター——

相沢会長の時，編集幹事を担当していたので，まずJSHIニュースレターを出して会員の交流を，そして学会誌を出して会員のオリジナリティーを守り，残したいと願った。計らずもその計画が大会長をおおせつかった第3回の浜松での総会の時に実現した。Blue and Yellowのツウトンカラーの表紙にMHC & IRSの漸新的な学会誌が誕生，会員の皆様に驚かれたと同時に学会の将来に明るいイメージを与えることになった。学会のプログラム・抄録，今迄の研究会・学会の歴史，ミニレビュー，原著(short paper)，会則，評議員，名簿等も載せたので，学会の会場、特にポスターの前などでカラフルな学会誌を持って討議している会員がめだつた。

中にはそれをかかえてポスターの前で写真におさまっている若い女子会員も出てきた。又，特別招待

者のDr. D. CharronやDr. J.Hansenにもおほめの言葉をもらい，Dr. Charronの要望でHLAの発見者Dr. J. Daussetへ謹呈した。お礼の手紙をいただいたり，今回の12th IHW & Cの時，お礼を言われて歓迎を受けた。表紙の色，字と色と大きさ配置等々一緒に考えてくれた家内も同行したので共に喜び，学会誌の益々の発展を祈ったのであった。

猪子先生に編集担当理事をお願いし，翌1995年より学会誌はMHCと改名，年3回発行することにした。JSHIニュースレターは1回限りとなり内容は各volumeの第3号へ載せることにし，後世に残すことにした。1994 Vol. 1, No. 1より国会図書館に登録収蔵されている。会員の皆々様，我々の足跡を残しつつ，世のため人のためになりましょう。それにしても猪子先生をはじめ教室の皆様のご努力に頭が下り，感謝の念一杯である。

——学会と事業——

平成7年7月，内藤説也教授の大会長の下，第4回日本組織適合性学会が福岡で開催された。同年4月より発足した(社)日本腎臓移植ネットワークの前理事長尾前先生よりの学会への要請で協力を頼まれた。学会として団体会員にもなり積極的な協力をするに理事会・評議員会・総会を経て決まり，臨時理事会も開催して協力内容を討議して秋には申し込みをした。一口に言えば“HLAタイピングに関する事業を学会がやっけてあげますよ”ということであった。しかし，ネットワークの事業と学会が考えていることとは組織上からしても考え方，内容もどうもかみあわなくて終ってしまった。ネットワークは個人的な協力を求めて組織適合性委員会を組織上発足させ，実務的にはHLAタイピング共同研究会を作って全国をまず5ブロックに分けて全国レベル

で統一し、死体人腎移植をスムーズに推進することになった。平成8年10月から7ブロックとなった。

学会の組織と活動と社団法人の事業とは質と量が異なり一緒にすることは不可能であることを学んだ。学会員が個人として患者さんのために社会・医療事業に参画することは可能であり、大切なことである。ボランティア精神を大いに発揮する場となる。

—12th IHW & C—

任期の後半に、Dr. D. Charron の Chairman の下、ワークショップが St. Malo で、カンファレンスが Paris で1996年6月に開催された。日本勢は1991年横浜での11th IHW & C 主催で疲れてしまい参加者が少ないから是非参加者をつのって欲しいと Dr. Charron から再三の要請があった。第3回の浜松での大会に彼を特別招待したのも12th IHW & C の宣伝も兼ねての計画であった。日本勢は第11回日

本組織適合性ワークショップ（世話人代表園田俊郎）が鹿児島市で1993～1994年に開催され（日本人の HLA 第11回日本 HLA ワークショップ共同報告、今日の移植 Vol 7. Suppl. 1994; Advances in HLA typing—Proceedings & the 11th Japan HLA Workshop, Dec, 3rd—4th, 1993 Kagoshima, Japan. *MHC & IRS* Vol. 1, Supplement, 1994）確かに少し疲れていたのかも知れない。しかし十字先生、猪子先生、前田先生、園田先生等々はそれぞれの Section の Chairman として活躍なさっていたし、日本勢はそれぞれに質の高いワークショップ参加、カンファレンスの発表をしていたので大変にうれしかった。ワークショップの最後の夜、皆でうたった坂本九ちゃんの“スキヤキソング”はとてもよい思い出として残っている。学会員の皆様様の益々のご活躍、ご発展を祈ってやまない。

